



令和6年能登半島地震によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の皆様にご挨拶申し上げます。
また、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。
被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

発行：府中市 編集：総務管理部防災危機管理課
〒183-0056 府中市寿町1-5 中央防災センター
電話：042-335-4098 FAX：042-335-6395
メールアドレス：bousai01@city.fuchu.tokyo.jp

だれひとり見逃さない 震災時の安否確認の取り組み

震災時に素早く避難することが困難な高齢者や障害者などの要配慮者をはじめ、病気で動けない方や地震の揺れの最中に怪我をしたり閉じ込められたりして身動きが取れなくなった要救助者も、避難するためには支援が必要となります。

このように、震災時には誰もが要配慮者や要救助者になり得ることから、平常時からご近所同士で安否の確認ができる取り組みを行うことはとても重要となります。

安否確認の必要性は高まっている

建物の倒壊により多くの犠牲者を出した1995年の阪神・淡路大震災。

震災から29年が経過するなかで建物の建て替えや耐震化が進み、地震の揺れに強い建物が増えつつあります。これらの取組により、令和4年に東京都が公表した「首都直下地震等による東京の被害想定」では、府中市における建物の倒壊数や死者数は過去に想定されたものに比べて減少しています。

一方、屋内では家具類の転倒や落下によって怪我をしたり身動きが取れなくなったりして、救助が必要な方が多数発生することが想定されます。

建物に大きな被害が見られないと、建物内にいる要救助者が見逃されてしまう可能性があるため、ご近所による安否確認の必要性はより一層高まっていると言えるでしょう。

※なによりも建物の耐震性を高めることが重要となります。建築物の耐震性の確保については自主防災ふちゅうVol.8(2022.2)の4面で紹介しています。

写真出典：熊本災害デジタルアーカイブ／提供者：益城カメラ



文化センター圏域 自主防災連絡会

地震や台風、多摩川の氾濫などにより、大規模な災害が発生すると被害が広範囲にわたるため、救出・救助をはじめとする行政の支援「公助」を全ての被災者に直ちに届けることは困難となります。

このため、自分や家族を守るための備えや行動「自助」と、ご近所や地域が協力して自分達のまちを守る「共助」を推進して災害に強いまちを作ることが防災対策には求められます。

自主防災連絡会は、この「自助」「共助」を活動の理念として、災害発生時はもちろん、平常時から地域が一体となって防災活動を推進する自治会・町会を主体とした組織です。

自主防災 連絡会の 目指すべき姿

圏域内の住民一人ひとりが、災害から「命を守る」ための備えができています。

自助

近隣住民がお互いに助け合う関係が築けている。

共助

圏域の特性に合った防災活動の支援を実施している。

公助

押立文化センター圏域 押立防災フェスタ

押立文化センター圏域自主防災連絡会では、子どもや親子が楽しみながら防災について学べる「押立防災フェスタ」を開催しました。

また、ペットとの同行避難を考えるペット防災セミナーを実施しました。



押立は多摩川の浸水想定区域
ペットとの同行避難は飼い主の皆さんにとっては、とても大事な防災対策です。



子ども達は防災カードゲームで
楽しみながら防災について学びました。



学校(防災拠点)

10月28日(土) / 南町



避難所の防災資機材を確認しながら、改めて地域や家庭内で何を備えるべきかを考える機会となりました。



住吉文化セン

武蔵台文化

応急給水訓練

市内に4か所ある給水所のうち、南町給水所と台浄水所において東京都局の指導のもと応急給水を実施しました。

給水活動の流れや給水器材の組み立て方についてがあり、参加者の中には給水器材を持ち帰る方もいました。

防災まち歩き



センター＆ 七センター圏域



東

新・浄
武蔵
水道
訓練

資機
説明

水袋を持参して、水を入れて重さを実感しました。



(武蔵台)



府中市社会福祉協議会が主催する防災まち歩きに参加しました。

防災の視点で自分たちの「まち」を見直すことにより、新たな発見や防災に関する地域の強み・弱みを確認することができました。

四谷文化センター圏域

避難所開設訓練



参加者全員で防災倉庫に入っている資機材や非常食の確認を行いました。

四谷文化センター圏域自主防災連絡会では、日新小学校において四谷文化センター圏域コミュニティ協議会と共催で、地震を想定した避難所開設訓練を実施しました。



車いす利用者が避難所を体験
車いすの方が避難所で生活できるようご意見を伺って避難所運営に役立てます。



防災倉庫内の資機材を実際に使って避難所の開設を行いました。

()を中心とした地域防災活動にも協力しています

町小学校地域防災訓練

住吉圏域

訓練では、参加者は受け身ではなく、地域が中心となって自分たちが避難所を運営するというテーマに基づき実施しました。中学生ボランティアも積極的に協力してくれました。



子ども達は事前学習で防災について学び、その成果を会場で発表したり、パネルに展示したりしました。

12月16日(土)／府中第二小学校夜間防災訓練

中央圏域



夜間の訓練は何といても照明の確保が最優先です。明かりが確保できれば周囲の安全性と安心感が高まります。



夜間に地震が発生したことを想定した避難所の開設訓練を実施しました。参加者は各々がヘッドライトや懐中電灯を装備して準備万端で挑みました。



避難所(体育館)に整備された非常用発電装置を起動して照明を点灯させました。これにより避難所での作業効率が格段にアップしました。

今後も各文化センター圏域の自主防災活動を紹介していきます。

兵庫県南部地震 1.17は忘れない

～神戸で懸命に災害救助にあたった消防士の思いと教訓～

(当時の神戸市消防局 兵庫消防署職員)



(写真提供:神戸市東灘区国道2号小路付近)

1995(平成7)年1月17日午前5時46分、神戸を襲った震度7の揺れは尋常ではなかったが、実際に目にした神戸の街の状況は想像を超えていた。「壊滅状態」と言ってもいいくらいだった。当日の朝、私は自宅の布団の中で大きな揺れに目を覚ました。「地震だ」と思うと同時に、別の部屋から家族の悲鳴が聞こえた。タンスが倒れ、一瞬で家の中は物が散乱した。家族の無事を確認すると、私はバイクで、当時、勤務していた兵庫消防署へ向かった。とんでもないことが起こったという事は理解しているものの、原形をとどめないくらいに崩れたビルや、無残に折れ曲がった高速道路を目の当たりにすると、これが本当に現実起こっていることなのかとにわかには信じられなかった。消防署に着くと、そこはすでに戦場と化していた。震災直後から火災が発生し、空には黒煙が見える。あちらこちらからサイレンの音が聞こえた。



(写真提供:神戸市長田区日吉町)

当時勤務していた兵庫区と長田区あたりは木造家屋の密集している地域が多く、倒壊した家屋に火災が発生し、一面がまさに火の海だった。瓦礫をかきわけ現場へ入っても水が出ない。通常なら体重をかけて押さえ込むほどの水圧で水を出すホースからは、力なく、わずかな水がこぼれる程度だった。「はやく消して!」と泣き叫ぶ被災者の声を聞きながら、延焼して次第に焼け落ちていく建物を呆然と見守ることしかできなかった。延焼を食い止められないとなると、倒壊した家屋の下敷きになっている人々たちを、一刻も早く救出しなければならぬ。火の手はもうそこまで迫ってきていた。住民も消防士も一緒になって懸命に瓦礫をどけていくが、重機もない救出作業は遅々として進まない。折り重なった瓦礫は想像以上に重く、だんだん手に力が入らなくなってくる。そこに人がいると分かっているにもかかわらず、あげられない。「もう少しがんばって、絶対助けるよ」励ましながら作業を進めるが、次第に声の反応がなくなっていく。



(写真提供:神戸市長田区笠通付近)

現場にいた誰もがやりきれない思いを抱えながら、それでも作業の手は休めなかった。あの広大な瓦礫の下に何人の人たちが助けを待っていたのだろう。小さな子供やお年寄りもいたに違いない。しかし延焼は食い止められず、無情にも炎は瓦礫を飲み込んでいった。現場で不眠不休の救助活動をしている消防士の多くが自らも被災者だった。家や家族を亡くしても他人を助けるためにがんばっている者もいた。「助けて」「火を消して」と懇願されてもどうすることもできない自分の無力さを思い知り、やりきれない思いを抱えていたのは私だけではないはずだ。しかし、あの時応援に来てくれた他都市の消防士を含め、現場に携わったすべての消防士はできる限りのことを精一杯やったのだ。救出したとき意識がなかったあの赤ちゃんは助かったのだろうか。助け出されて外の様子を見たとき、いっそ死んでしまえばよかったとつぶやいたお年寄りは、生きる気力を取り戻したのだろうか。あの時助かった命が、もう一度前を向いて歩きだしてくれていることを願っている。

(出典 兵庫県教育委員会 副読本「明日に生きる」より)

◆自助の大切さ

平成20年8月から運行している起震車「マグマII」は、最大震度7の大地震を再現することで揺れの中で身を守る行動を学ぶことができ、自治会や学校、事業所等が主催する防災訓練等で震度7の揺れを体験した方はこれまでに15年間で20万人を超えています。

起震車の室内モニターは、揺れに合わせて家具の転倒や家が傾く映像がリアルに再現されますが、実際に起きているわけではないので起震車の震度7による死者や負傷者は今まで1人もいません。

言い換えれば、地震に強い家に住み、家具類の転倒や落下を防止する対策をしっかり行っておけば、被害の発生を抑えることができると言えるでしょう。

自分や大切な人の命を守るのは、あなたの日頃の備え「自助」なのです。



令和6年能登半島地震の被災地に支援物資を届けました。

令和6年1月1日に発生した令和6年能登半島地震により、本市と「国府」として以前からつながりのある石川県七尾市では震度6強の揺れを観測し、死者5名、全壊225棟※の被害を受けました。

市では、七尾市を支援するため1月9日と1月22日に10のペットボトル飲料水10,800本、アルファ化米2,000食、ブルーシート200枚を車両で届けました。

現地では、全国各地から届けられた支援物資の荷下ろしや市民への配付を他自治体の応援職員とともに行いました。

また、1月29日から災害ごみの受け入れ業務に職員を派遣しているほか、災害支援寄付金の代理受付を行っています。 ※支援に向かった令和6年1月8日時点の被害となります。

